

勝田守一の教育思想史的研究序説（上）

——「哲学」と「教育学」との間——

横 畑 知 己

I) はじめに

本稿で考察の対象とする勝田守一（1908 - 1969）は、1932年京都帝国大学文学部哲学科卒業後（西洋哲学史専攻）、1934年9月から1942年10月まで旧制松本高等学校の哲学の教師であった。その後、1942年11月から文部省図書監修官となり、敗戦を迎えた。戦後、公民教育刷新委員会世話人、教科書局社会科主任などを歴任して、1949年4月文部省を依願退職、学習院大学文政学部哲学科の専任教員となるが、2年後の4月東京大学教育学部に赴任、以後定年退職まで勤めることとなる。

1969年7月30日、退職後まもない勝田は惜しまれつつ亡くなった。行年60歳であった。死の前年、戦後の教育運動における同志の一人であった社会学者日高六郎との対談に臨んだ勝田は、自らの教育と教育学への関わりについて、次のように述べていた。

「私が教育に関心を意識的に持ち出したのは戦後なんです。それにはそれなりの理由があったのです。個人的なことになりますが、私は戦前は旧制高校の哲学の教師だった。やはり戦争を通して、いろいろな意味で、自分の学問のあり方の破産を感じたわけですね。哲学という学問は、ふつうの意味では、検証できない学問ですが、自分の思想なりメソッドなりを、ある意味で検証できるのは、それが教育という場に、どれだけ具体化されるか、そこにあるのではないか。私は、デューイという学者は、そういう経験を自分のなかに持ったのではないかという気がしますね。だから私は、けっして転換というか、分野を変えたという気持ちは一つもなく、教育の問題に関心を深めるようになった。それにはほかの事情もありましたが。その点からいっても、教育学を勉強することと、教育によって人間を形成し直していくというか、日本の国民の人間形成ですね、それに責任をもっていくということ、その二つを、そもそもの最初から、背負いこまされていたという気がするのです¹⁾。」

ここで述べられている、勝田が背負った「二重の課題」、教育学研究と歴史的課題としての日本国民の形成という課題は、もちろん戦後になって明確に自覚され表現されたものではあるが、戦中における勝田の思想的営為の中にこれらの課題が胚胎していたことを無視す

ることはできない。「敗戦」をはさんでのこの時代に、勝田は、教師としてあるいは文部省の中でどのような生活を送ったのか、それとの関連でいかなる思想的営みを行っていたのか。そのことを明らかにすることが、本稿の課題である。

学者・思想家としての勝田の全体像を明らかにすることが、筆者の最終的な目標であるが、本稿では、勝田が自他ともに教育学者として認められる分岐点となったと思われる1951年を一つの画期として位置づけ、それ以前の思想形成の過程を明らかにしてみたい。東京大学教育学部に着任した勝田は、同年11月に日光で開催された第1回の日本教職員組合教育研究大会の講師兼世話人となった。また同じ月に復刊された雑誌『教育』の初代編集長をも引き受けている。そしてこの年、教育に関するはじめての単行本として『平和と教育』を公刊した。本書には、教育研究の道を選択した勝田の抱負がよく現れている。

「序にかえて」の中で勝田は、次のように述べていた。

「時々の問題について、考えをのべるに当って、私の意図した第一の目的は、日本の再建という一線であった。そこから、私は日本の生活の改造という重大な問題に取り組む教育の仕事を見出した。私のいう日本の再建は強大な日本帝国の復活とはまったく縁がない。最大多数の国民、つまりは働く日本人が、自己の運命を自己の意志と手で切り開く可能性を、その生活の中に実現できる社会をつくりあげていくことを意味している。そのためには、私は私たちを不幸にして来たいろいろななきずなを断ち切らなければならないけれども、その一つとして、日本人の国民性の改造という課題を取りあげなければならないと考えた。そして、この国民性の改造を次代の人々の教育に托すことが教育の仕事だと思い続けて来たのである。

ただ私は、それをひとつごとくのように扱うことには堪えられないし、私たちの仕事の実を結ぶためには、結局私たちの自己批判を通過しなければならないことも明らかだ。もし、私にあやまりがあれば、それは、自己批判の不足なのではないかと私は恐れている²⁾。」

本稿は、勝田守一の教育思想史的研究を意図するものであるが³⁾、その立場から、勝田研究のための基本資料、先行研究について次にのべて、あわせて本研究の視点を提示しておきたい。

まず、著作資料についてみると、勝田自らの手で刊行された最後の著書『教育と認識』（国土社1968年）の巻末に主要著書として掲載されているのは、『シェリング』（弘文堂1936年）、『平和と教育』（刀江書院1951年）、『学校論』（要書房1952年）、『岩波小辞典・教育』（共著、1956年）、『日本の学校』（中内敏夫との共著、岩波新書1964年）、『能力と発達と学習』（国土社1964年）、『国民教育の課題』（国土社1966年）である。勝田には、編集に携わった多くの講座類があり、また多くの雑誌論文も存在するが、単独の著書として公刊された著書

は意外に少なく、ほぼ上記のものに尽きるといってよい。勝田の死後、大田堯を中心とする著作集刊行委員会が組織され、残された著作、論文の大部分が、『教育と教育学』（岩波書店1970年）および勝田守一著作集全7巻（国土社1972年6月～1974年6月）に収録されている。700頁近い前者には、岩波全書のために書きためられていた「学校とは何か」などの未発表原稿4編が含まれ、全体として勝田の教育研究のもっとも原理的なものを理解できる構成が意図されている。後者の著作集は、『戦後教育と社会科』（第1巻）、『国民教育の課題』（第2巻）、『教育研究運動と教師』（第3巻）、『人間形成と教育』（第4巻）、『学校論・大学論』（第5巻）、『人間の科学としての教育学』（第6巻）、『哲学論稿・随想』（第7巻）という問題別構成をとっている。第7巻には、勝田守一「履歴・著作目録」が付けられていて、勝田研究のための基本的な情報が与えられている。特に著作目録は、未収録の資料を含めて詳細なもので資料探索の上で極めて有益である。

また、この著作集の月報には、戦前、戦後の勝田を知る多くの関係者の証言が寄せられていて、付録の「履歴」とともに勝田の生活史や人となりを知るための貴重な史料となっている。勝田の伝記資料としては、これに加えて以下のものが多くの手がかりを与えてくれる。まず、短いものではあるが、大田堯「ある教育学者の戦後—故勝田守一教授の生き方—」（『朝日新聞』1969年8月12日）は、一つの評伝として必読と思われる。次に、勝田が深く関わった民間教育研究団体である、教育科学研究会の機関誌『教育』（1969年10月号、「勝田追悼号」）がある。さらには、東京大学教育学部教育学科の大学院生有志が編集した『勝田先生を偲ぶ』（1970年）と勝田先生を偲ぶ会（旧制松本高校での教え子たちのグループ）の手になる『想偲春—勝田先生追悼集』（1971年）が、それぞれの学校での教師としての勝田の肖像を描いたものとして多くの示唆を与えてくれる。

勝田守一に関する教育思想史的研究は必ずしも多いとはいえない。前記の著作集各巻に付されている解説は、それぞれが先行研究と見ることでもできるが、個別の問題に即して本論中で触れることとしたい⁴⁾。ここでは、まず堀尾輝久「勝田教育学の学問方法意識—『教育と教育学』の書評によせて—」を取りあげておきたい⁵⁾。この論文は、副題に見られるとおり、勝田の死後まもなく刊行された『教育と教育学』に対する書評として執筆されたものである。しかしながら、この堀尾論文は単なる書評にとどまるものではなく、勝田の教育学構想を全体として性格づける意図を持って叙述されている。その性格を堀尾は、「それは（勝田の教育学論—引用者）、一方で教育実践を軸とする、教授学へと収斂する教育学論であるが、同時にそれは『人間学としての教育学』の、広い視野に立つものであった⁶⁾」と特徴づけている。さらに注目しておきたいのは、この「人間学としての教育学」への関心は哲学者としての勝田の一貫したモチーフであったとの指摘である⁷⁾。この堀尾の指摘を教育思想史的な考察を通して具体化したものとして、寺崎弘昭「勝田守一における『人間学としての教育学』—人

間の自由の可能性としての教育⁸⁾」がある。寺崎は、この論文で勝田の教育学を包括的に論ずることは目的とはしないと限定しながら、「むしろ、勝田における上述のような『人間学としての教育学』の探求という関心それ自体を規定しその底に流れていたものを浮き彫りにしようとする。それは、戦前・戦後を通じ、勝田の生涯を通じて一貫していた、人間へのある関心のありようである⁹⁾」とする問題意識を述べている。この視点から、寺崎論文は勝田の戦前の哲学論稿を戦後の教育学的な論稿と関連づけながら考察することによって、勝田守一の教育思想史的研究の新局面を拓いている。それは、とりわけ、勝田のシェリング研究や勝田とデューイとの関係を論じた部分によく現れている。

寺崎論文は、勝田の作品を読み込むことによる教育思想史的研究の典型的なものと筆者は考えるが、これに対して本稿で筆者が試みようとするのは、むしろ歴史研究としての教育思想史的研究である。換言すれば、勝田の教育思想を捉えようとする点では共通の目標を持つが、筆者は勝田の思想を徹底してその時代状況の中で理解することに力点を置いてみたいと思う。そのことによって、勝田が生き、活動した戦中・戦後の日本の教育史の姿を再構成する出発点としたいと思う。

このような課題を達成するために、勝田の教育思想形成の過程を、彼の生活史と思想的営為の歴史とを結びつけながら明らかにしていきたい。そのための方法として、著作集の問題別構成の立場をとらず、資料を年代に沿って読み進みたいと思う。また、このことと関連して、条件の許す限り、初出の資料に拠りたいと思っている。

論文の構成は、以下のとおりである。

- I) はじめに
- II) 生い立ちと思想形成—京都帝国大学入学まで（以上本号）
- III) 「哲学者」としての学問的出発—卒論から『シェリング』まで
- IV) 教師生活と学問観の転換—松本高等学校時代
- V) 文部省時代の勝田守一（戦中）
- VI) 文部省時代の勝田守一（戦後）
- VII) 「哲学」と「教育学」—学習院大学時代

II) 生い立ちと思想形成——京都帝国大学入学まで

勝田守一は、1908（明41）年11月10日、日本画家であった父勝田蕉琴（本名、良雄）と母米子（ヨネ）の長男として、東京、本郷の千駄木で生れた。昌二（1912年生）、三重子（1914年）、四万子（1917年）、慎吾（1919年）の4人の弟妹がいた。これ以外の家族としては、父方の祖父満業（1847～1924年）が亡くなるまで同居していた。

勝田に昔話を聞かせたという満業は、維新前は川越藩の松平周防守に仕えた茶坊主であった。松平藩は、1836（天保7）年石見の国浜田から福島棚倉に転封され、1866（慶応2）年には川越へと国替えになっている。したがって、満業にとっての故郷は棚倉であった。維新後の秩禄処分で武士を廃業した満業は、西南戦争に従軍した後、棚倉に戻り、ここで父蕉琴（1879～1963年）が生まれている¹⁰。晩年病中の勝田は、松本高校時代の教え子に贈った『楽我鬼帖』と題された随筆随画帳に、この祖父からの影響について、「僕が大阪商人的合理主義に染めないのは、下級武士の没落組の子孫であり、日本正統的官僚制に反感をもっているのは徳川方の下級武士であった祖父さんの薩長勢力に対する負犬の後遺症によるものだろう¹¹」と記している。勝田の家族的背景を探る上で見過ごせない論点である。

勝田が生まれたころ、父蕉琴は日本画家としての実力は評価されつつも、生活的には厳しい状況が続いていた。蕉琴が花鳥画家として最も充実した時期は大正の後半から昭和の初めにかけてであり、それに伴って経済的にも安定した条件が生まれたという¹²。蕉琴は、努力家で研究熱心な画家であり、情にあつい熱血漢として世間から認められていたという。子どもたちにとっては「権威」ある父親だと思われるが、後年勝田は、その親子関係について次のように友人に語っていた。京都時代の勝田が夏休みで帰省した時、たまたま作品製作中だった蕉琴が、勝田の目前で、2羽の雀を書き加えた。勝田はこの描き足しはないほうがよいと思わず口に出したが、たちまち蕉琴は不機嫌になったという。後日、新聞に掲載された作品評に、自分の感想と同じ内容を見出した勝田は、その切抜きを父宛に送った。やがて、次の冬休みに帰省した時、その切抜きは外出中の父の書斎の机の上に置かれてあった。自分は「おくて」だったという勝田に対して、友人は20代なかばの遅い「反抗期完成事件」と評した¹³。一方、勝田の生涯にわたる友人玉井茂によれば、蕉琴より2歳年下で棚倉の呉服商の娘だった母米子は、「私の知る限りでの最高に折り目正しい人で、いつもきちんと三つ指のていねいさで迎えてくれた。とくに路上で外出しようとする母上に会ったときなど、私自身はもう歩きかけているのに、襟巻をとりコートをぬぎ始める始末で、私は棒立ちでそれを見ていなければならなかった。といて、別に堅苦しいわけではなく、親切で優しい母親だった¹⁴」という。

1915（大正4）年4月、勝田は、千駄木小学校に入学する。小学校時代の勝田は、「ひよわ」で、けんかなど不得手な子どもだったという¹⁵。5年生の時には、腸チフスに罹って、長く欠席をせざるを得なかった。1921年4月、東京高等師範学校付属中学校に入るが、依然として体は虚弱で、背も低かったため、劣等感を抱き続けていた。本人の回想では、「体操の先生がクラスメートの前で僕を指し、額に立じわは出てるし、顔色は悪い、こんなでは駄目だなどとこき下ろすのだから、いいかげんいやになった」こともあったという。

ところで、勝田が中学時代に経験した最大の事件は、関東大震災の発生であった。震災は、中学3年生であった勝田に「この世に安心立命というものはないのだという印象」を残

したが、幸い勝田の自宅はこの年の7月に新築したばかりで、家自体がつぶれるような深刻な被害は免れた。震災の心理的ショックは5年生になるまで続いたというが、勝田自身の体の方はだんだん丈夫になり、身長も4、5年生の間に急激に伸びた。健康上のこともあってか、中学時代の勝田は読書家で、当時刊行された森鷗外全集などを熱心に読む文学少年だったようだ。中学5年生になると学校の勉強も進むようになり、1926年4月には、第一希望の文科甲類には入れなかったが、第一高等学校文科乙類に進学する。

青年期の勝田に影響を与えた人物の一人として、夭折した作家梶井基次郎(1901～1932年)がいる。1921年の3月、紀州湯先温泉に旅行中の梶井は、そこで4最年長の京大医学部生近藤直人と知り合いとなる。近藤は勝田の従兄で、当時肺結核で休学して温泉療養中であった。近藤は絵画や音楽への造詣が深く、それに心酔した梶井は生涯の最後まで近藤との親交を重ねた¹⁶⁾。梶井の書簡に、「勝田さんの兄弟」についての記述が現れるのは、1922年7月からのことであり、そのころに勝田と梶井の交流が始まったようである¹⁷⁾。近藤と梶井を通じて、勝田は当時の高校や大学に関する情報を得るとともに、彼らの文化的世界にふれることとなった。たとえば、勝田は「私の受けた音楽教育」という随想の中で、「家には、音痴で、音楽ぎらいの父親がいて、家で音楽らしいものをきく機会は絶無であった。中学も卒業の近くになってから、音楽を文化として意識する時期がはじまるのだが、それは従兄の影響によることは確かである。つまり、レコードをきく、ということがはじまるのである」と回想している¹⁸⁾。

ほとんど近藤を介してであったが、梶井との交際は、その死の直前すなわち勝田が大学3年生の時代まで、10年余りにわたって続いている。梶井の人となりと文学が勝田に与えた影響は深く、戦後の教育研究の中にもいろんな形で想起され、勝田の教育学的思考の培養地の一つとなった。最晩年の勝田は、梶井にまつわる思い出を「梶井基次郎と私」と題する小文として残した。そこでは、作品ならびに勝田の経験を通しての梶井の「子ども観」が次のように、印象深く語られている。「梶井さんの子どもに対する愛情は（中略—引用者）子どもを凝視するという行為のなかににじみ出ている。私の大好きな作品の一つ『城のある町にて』の〈昼と夜〉の中に〈子供といふものは確かにあの土地のでこぼこを冷い莫塵の下に感じる蹠の感覚の快さを知っているものだ。…〉という一節がある。〈地面にはでこぼこがある。〉私はそれを読んだ時、あっと思うほど幼い自分の感覚をあざやかに蘇らせていた¹⁹⁾。」勝田がこの一節に言及したのは、このときが初めてではない。勝田が東大教育学部に赴任して間もないころ、戦後教育改革に対する政策側からの反動と「新教育」に対する民間からの批判と反省の時期、勝田は、「子どもの感覚」という文章を書き、上記の梶井の文章を取りあげて、以下のような議論を展開している。

「子どもの感覚（私はここで古い心理学のいう抽象的な要素としての感覚をいって

るのではない)は正当な権利をもって、かれらのいのちの成長の中に生きていくという仕方で学校教育というものが行われているのだろうか。私はいわゆる童心主義のようなものをいっているのではない。もっと人間的な問題、もっと歴史的な問題までを考えるのである。

(中略)ゴザの表面に感じる地面のデコボコというのは、私たち日本人の庶民の子どもたちの生活感覚のようなものではないだろうか、ということである。こういう感覚は、いいとかわるいとかいう前に、生活のように誠実だというほかはないように思う。

教育というものを、子どもの中にあつたなものかを引き出すことだと考えるのはまちがいである。それは、やはり、なにものかを新しく作り出すことである。しかし、生活のように誠実な感覚を、おき去りにして、それとは別な知識や技術やあるいは価値の見方などを教え込むということは人間にとってほんとうに幸福なことかどうかは、大へんに重大な問題になる²⁰⁾。」

ここには、梶井基次郎から学んだ勝田が、改めて教育学者として、現実の子どもを深く理解する視点を自分の中に構築していく姿が読み取れるのではないだろうか。

勝田にとって梶井の存在の持つ意味は、これらの点にとどまらない。梶井との交流は、勝田の進路選択にも少なくない影響を与えることになる。随筆「梶井基次郎と私」の中で哲学を志すきっかけについて、勝田は次のように述懐している。

「私が第一高等学校に入学したところ、梶井さんは東大の英文科の学生だった。その折、梶井さんから阿部次郎の『ニーチェのツァラトゥストラ・解説並びに批評²¹⁾』は感動的だからぜひ読みなさいといわれたことがある。私は阿部次郎の外の著作は余りすきではないが、この本は今でも私の書架に持っている。この書に魅せられて、私の哲学への関心はさらに深められたことは確かである²²⁾。」

この本は、「単にツァラトゥストラの評論たるにとどまらず、また現在における自分の思想と人格との告白である」と著者の阿部が序で述べているように、一世を風靡した『三太郎の日記』(1914年)とは異なる執筆態度から生れた作品であった。後に卒論で「シェリングの史観に於ける個体の自由」の問題を論ずることになる勝田が、本書の中で阿部が論じた「自由」に関する議論や、ツァラトゥストラを評して「社会の多数が善とするがゆゑにこれを善と信じ、社会の多数が悪とするがゆゑにこれを悪と信ずるがごとき、自己の心証を没却したる、雷同付和の評価を擯斥する意味において、彼は徹底的個人主義者である」(p78)と論じた部分などに共感を覚えたであろうことは十分に想像される。

勝田の哲学への志向を決定的なものとしたのは、高校生活の後半における三木哲学との出会いであった。1967年、新たに編集された『三木清全集』(全19巻、岩波書店)第12巻の月報に勝田が寄せた「三木哲学のファンであったこと」には、三木哲学と勝田の思想形成と

の深いかわりが語られている。まず、昭和初年当時の知的青年の置かれていた状況を、「社会主義」運動との関連で、勝田は次のように要約する。

「（前略）活動家と同調者、さらに共感的な思索者では、その『気分』はそれぞれにちがう。しかし物想う若ものたちが、この『運動』の高貴な犠牲のもとで生き続けていた『社会主義』の理想に無関心であるなどということはできなかった。（中略）

ところが、当時の社会科学文献（といえはマルクス主義にきまっていた）にはどぎついほどの戦略・戦術や党派性に凝り固まった翻訳調が氾濫していたし、批判は権威的正統主義の臭いをふりまいていた。（中略）『小市民的』という悪評を受けながら、もっと自分の内部の葛藤と必然的に連りをもつ肌理の細かい理論の支えが欲しいと思う知的青年たちの要求があったことは、ある程度普遍的傾向といっている。（中略）

こういう時期に颯爽と論壇に登場したのが三木さんだった。『唯物史観と現代の意識』を私はまず手にした²³⁾。」

三木清の『唯物史観と現代の意識』の刊行は、1928年5月、勝田が高校3年生になった直後のことであった。このころから勝田は、三木の講演会の熱心な聴講者となったようで、そのことを「ファン」という言葉に込めて回想している。勝田の周辺でも、1928年6月8日には、第一高等学校弁論部主催で「『唯物史観と現代の意識』に就て」と題する三木の講演会が早速開かれている。そこで興味深いことは、一高生の中にも、「三木哲学は唯物論ではない」とする服部之聡らによる「正統主義」的な三木批判の影響が見られることである。三木の講演の紹介記事には次のようなコメントが付けられていた。

「もぐらのような哲学の教室の中から、独り雄々しく飛び出でた三木先生に深く共鳴すると同時に先生に深き関心を向けずにはゐられぬ。それが『解釈学的現象学』であり『イデオロギーの系譜学』であって、『唯物論哲学』でない以上それは何処までもブルジョアの発生根拠を衝かるべきであり、若しこの理論に則れば実践的誤謬に陥るのだと信ずる。以上謹言して三木先生の尚一段の発展を祈ります²⁴⁾。」

この事例に見られるように、三木の「マルクス主義」研究は、当時の左翼運動からはたちまち忘れられていく運命をたどったが、勝田における三木哲学の存在意味は別の形で生き続ける。『唯物史観と現代の意識』の次に勝田が取り組んだのは、三木の処女作『パスカルにおける人間の研究』（1926年6月）であり、それは「アントロポロジー」（後には「人間学」の語が使用される）を意図するものであった。「人間学」への志向は－内容的には変化するが－勝田の哲学、教育学に持続する一貫した問題意識であったことを、ここでは留意しておきたい。

一方、「社会主義」への関心は勝田において失われたのではなく、戦中、戦後を通して、深いところで持続された。その実証は、本研究を通じての重要な課題の一つであるが、ここではひとまず、「三木哲学のファンであったこと」から勝田自身の言葉を引いておきたい。

「けれども、戸坂氏のいおうとするところは明快だけれども（戸坂潤「三木清と三木哲学」、1936年をさす—引用者）、三木哲学が追求してきた課題であった全的な人間存在の歴史哲学的解明と社会主義思想との統一の課題を、当時の『ファン』が戦争の時期を通してどういう受けとり方をしてきたのかを実証的に確かめてみたい要求をいまでも抑えがたい²⁵⁾。」

この文章には、勝田自身の戦中の思想と行動を探求する上での重要なヒントが隠されているとってよいだろう。

高等学校在学中、勝田は哲学を専門としての大学進学を決めていたが、最初は家庭の事情で東大の哲学科に願書を提出する。ところが、三木哲学の影響、また谷川徹三や梶井基次郎の勧めなどもあり、京都大学への志望をあきらめきれず、両親を説得して京都行きを実現する。その際、一高の友人、玉井茂の応援があったという。

〈以下、(下)に続く〉

注—————

- 1) 勝田守一・日高六郎対談「現代における教育の責任—知識人としての教師像」(『世界』1968年6月号, p 27)
- 2) 勝田守一『平和と教育』(刀江書院, 刀江文庫11, 「序にかえて」p1~2)。本書には戦後書かれた12編の論稿が、「平和と教育」、「社会と教育内容」の2部構成で収められている。なお、収録論文の多くは、勝田の死後5年をかけて編集された『勝田守一著作集』全7巻に収められているが、「序にかえて」を含めて未収録のものがある。
- 3) 教育思想史と教育学説史あるいは教育理論史の区別と関連については、寺崎昌男「日本近代教育学説史研究の方法と意味」(日本教育学会『教育学研究』第48巻第2号, 1981年6月)の整理が参考になる。寺崎に従えば、教育学説史は教育学者に対象を限定することが求められることになり、勝田のような履歴の人物の全体を扱うには、教育思想史の広がり対象を理解するのが有効であると筆者は考えている。
- 4) 各巻の解説の執筆者は、以下のとおりである。第1巻(楠原彰)、第2巻(大田堯)、第3巻(山住正己)、第4巻(藤田昌士)、第5巻(宮澤康人)、第6巻(堀尾輝久)、第7巻(坂元忠芳)。
- 5) 堀尾輝久「勝田教育学の学問方法意識—『教育と教育学』の書評によせて」(季刊『国民教育』第7号, 1971年冬号)
- 6) 同上, p131。
- 7) 同上, p134。
- 8) 寺崎弘昭「勝田守一における『人間学としての教育学』—人間の自由の可能性としての教育」(皇紀夫, 矢野智司編『日本の教育人間学』(玉川大学出版部, 1999年)
- 9) 同上, p83。
- 10) 勝田蕉琴ほか勝田の家族に関する事項は、とくに断らない限り、福島県立美術館『反骨の日本画家—勝田蕉琴展』(1998年)所収の「年譜」(堀宣雄, 増渕鏡子編)及び解説「勝田蕉琴—その生涯と画業」(堀宣雄)に依拠している。
- 11) 勝田守一著作集第2巻「月報」(1973年11月)より重引。なお『楽我鬼帖』については、須

勝田守一の教育思想史的研究序説（上）

田二郎「勝田守一論」（前掲『想偲春』所収）を参照。

- 12) 勝田蕉琴の生涯と画家としての歴史的評価については、前掲注 10) の「年譜」「解説」ならびに『福島県史』第 20 巻（各論編 6—文化 1）1965 年を参照されたい。
- 13) 古川原「子どもと社会—自伝的成長論」第 2 回（『教育』1978 年 2 月号）p118～120。
- 14) 玉井茂「われらが京都」（前掲『想偲春』）p50。玉井は、旧制第一高等学校（文科乙類）、京都帝国大学文学部哲学科を通しての勝田の友人。戦後は、岐阜大学で哲学教師として教鞭をとった。西洋哲学史に関する著作やヘーゲルの翻訳などの仕事が知られている。
- 15) 小学校、中学校、高等学校時代の生活については、引用文を含めて、特に断らない限り、勝田守一「回顧談」（前掲『想偲春』）に拠る。
- 16) 梶井から近藤への書簡は、1921 年 7 月 30 日付をもって始まり、1931 年 11 月 4 日まで、計 76 通が残されている。（筑摩書房『梶井基次郎全集』第 3 巻、1959 年）また、『新潮日本文学アルバム・梶井基次郎』（1985 年）には、近藤の写真が 3 点収められており、1 点は、1922 年 8 月に勝田蕉琴宅で撮影されたものである。残された日記の記述と合わせてみると、梶井の勝田家訪問は少なくない回数となる。
- 17) 1922 年 7 月 7 日付、宇賀康宛書簡（前掲『梶井基次郎全集』第 3 巻、p83）
- 18) 勝田「私の受けた音楽教育」（音楽教育の会『音楽と教育』1965 年 7 月号、勝田守一著作集第 7 巻所収）
- 19) 勝田「梶井基次郎と私」（麦書房『むぎ通信』第 1 号、1968 年 7 月）勝田守一著作集第 7 巻、p383～4。
- 20) 勝田「子どもの感覚」（音楽之友社『教育音楽』1954 年 7 月）、勝田守一著作集第 4 巻、p63～4。
- 21) 阿部次郎『ニーチェのツァラツストラ 解釈並びに批評』（新潮社、1919 年。『阿部次郎全集』第 4 巻所収、新潮社、1961 年）以下、本文中の引用は、全集版による。
- 22) 前掲、注 19)、p381。
- 23) 勝田「三木哲学のファンであったこと」（岩波書店、『三木清全集』第 12 巻、月報、1967 年 9 月）p 1～2。
- 24) 「弁論部部報」（第一高等学校校友会『校友会雑誌』第 320 号、昭和 4 年 2 月）p73～5。
- 25) 前掲、注 23)、p3。

（本稿は、2012 年度、東京経済大学「国内研究員」としての研究成果の一部である）